慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	彌生式土器と朝鮮の土器
Sub Title	Potteries of Yayoi-type and Corean potteries
Author	藤田, 亮策(Fujita, Ryosaku)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.24, No.1 (1949. 10) ,p.111- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彌生式土器と朝鮮の土器

藤田亮策

終戰後、國史教育の方針が急転廻して、紀記中心の上代史から考古学の研究の結果をとり入れた実証的方法にと代つて、著しく面目を更めたことは慶ぶべきである。ただ、初等・中等の教科書に事新らしい考古学的研究題目を挿入して、これを教員に十分理解せしめ、誤なく教へ得るであらふかを危まれるものが少くない。既に学界の定説として認められて居るものにも、考古学者自らの間に検討を要すべきものがあり、歴史教育に採用されるに至つては、責任を以て断定出来る程度のもののみであつて欲しいと思ふ。

我國の石器時代の研究は近時長足の進歩を遂げ、特に繩文式土器文化の調査は洵に誇るべきものがあり、精密な層位的並に年代的の研究の結果が続々と示されて来て居る。彌生式土器文化の研究亦最近に至り学界の寵児の如く宣伝されて、その性質がよく紹介され一般にも普及して来た。然し乍らこれ等土器を中心とする両系統の文化もその全國的性質とか周囲の大陸文化との關係等につきては、調査の不十分と資料の欠乏によつて、専門学者も首を傾ける点が少くない。

今茲に彌生式土器を一例にとつて見ても、その大陸から伝来とすることに誤はなくも、何時、何処から伝へられたかを何人も明に示してくれて居ない。少くとも彌生式土器そのものを周囲の大陸諸地に見ないことは五十歩百歩である。ただ、鳥居博士も早く指摘された通り、朝鮮半島を経て来た大陸の文化の一形式とすることに誤はなく、その原始形は明に朝鮮に見られるのである。我國上代文化の成立に最も重要の役割をもち、又繩文式土器文化の年代決定にも關聯するので、彌生式土器の本源につきての私見を述べて、学者の批判と是正とを願ひたい。

彌生式土器文化が大陸系統のもので、早く日本全土に普遍化して居たと思はれる繩文土器文化と性質を異にすることは、今や学界の定説といつてよい。このことを最も早く主張した鳥居龍藏博士は滿鮮の石器時代遺蹟の最初の詳しい調査者で、土器の形式の比較と伴出の石器の性質等から直覚されたものと思ふ。磨製石劍・磨石鏃・石庖丁・抉入鑿形石斧等が滿洲・朝鮮の石器時代遺蹟に通有のもので、我が國の彌生式系の遺蹟に見出されることは何人も知る所である。又朝鮮に近い北九州に彌生式土器並に上記の石器が最も濃厚の分布を示し、繩文土器と同一遺蹟に発見されるときは、彌生式土器が常に上層にあつて、繩文土器系文化に対して比較的後出のものであることも学者の間の常識である。又、筑前糸島郡松原並に丹後熊野郡函石浜の遺蹟から、新の王莽の貨泉の発見されたことによつて、我國の石器時代の下限を定める有力の一資料とすることは、西日本に於ける彌生式土器系文化に就いていふことで、同文化が金属初期の時代に亘ることをも示して居る。農耕牧畜の発展と稲米食の行はれたことを、彌生式系文化の所産とするのも、石鍬・穂刈用石庖丁の伴出、家畜の骨格の発見等に証拠立て、又米粃の発見とか土器底のモミ殼の痕迹等によつて稲の栽培されたことは何人も疑ふことの出来ない事実である。

以上一見明瞭のように見られる彌生式土器の大陸本源説も、まだはつきりしないいくつかの問題を含んで居る。尤も浜田耕作博士の河内國府遺蹟の調査報告に於ける彌生式土器をも原日本人の創造とする考へは、今は一般に認められず、所謂原始繩文土器も繩文式土器の一種であつて、繩文土器と彌生式土器の混合形式は其後各地に発見されて居て、此問題は解決ずみである。従つて大陸からの伝来文化たることは今日異説を見ないが、彌生式土器の朝鮮系たることを主張して来た一人である筆者にあつても、なほ合点しかねる点のあることを左に列挙して、識者の教示を俟つこととする。

1 彌生式土器の原型をどこに見るかといふ点。
2 彌生式土器の伝来を何時とするかの点。
3 彌生式土器と丹塗土器との關係。繩文土器の丹塗との關係。
4 櫛目文土器と繩文彌生両土器との關係。
5 甕棺葬の本源に關する問題。
6 須恵器と土師器との関係。

所謂彌生式土器は特殊の型式的発達を遂げて、曲面のなだらかな流線形の外容を示し、僅かの幾何学文よりも寧ろ形と磨研とによつて美しさを示して居る。口縁のそり、盌の丸底の彎曲面、高杯の脚の開き工合、壺の肩の

張り等に特徴があり、丹を塗つて磨き上げた鮮麗さと、轆轤仕上げの巧妙の製作のものの多いことが注目される。この種の單純にして文様の裝飾が少く、曲面の美しさと磨研の滑かさを誇る土器は朝鮮南部に少くなく、朝鮮及滿洲の純石器時代土器の一部に、この形式の原始的のものを認めることが出来、又中國本土の黑陶・彩陶系にも形の類似が多少認められる。然し乍ら、彌生式土器の隆盛期の特殊の裝飾法と形態とを、其まま大陸に求めることは無理であるが、最も簡單の形式を、朝鮮の石器時代の高杯・盌・深鉢・壺等に比較する時、何人も其類似と同性質とを肯定するに違いない。

これ等につきては一應朝鮮半島の土器の性質を一瞥して、その上更めて論究することとしたい。丹塗・櫛目文の手法につきても大陸の土器を知つて日本のそれに及ぼすのが便宜である。

朝鮮の土器につきては筆者は曾て東洋史講座所收の朝鮮考古学に略述したことがあるが、其後の所見により一部訂正を要すべきものがある。

朝鮮の石器時代土器に（イ）厚手無文土器・（ロ）丹塗磨研土器・（ハ）櫛目文土器の三種があり、全く性質を異にして居る。（イ）と（ロ）とは混在することが多く又混合形式が作られて居る。（イ）と（ハ）とも同一遺蹟に発見されるが、（ロ）と（ハ）とが混在することは極めて尠いと言つてよい。只、咸鏡北道羅南油坂貝塚等にては（イ）（ロ）（ハ）共に同一地域内に発見されるが、完全な学術的の発掘によつたものでないので、相互の關係は明でない。

無文厚手土器といつても全く文様が無いわけでなく、口縁部又は肩に僅に刺突文とか繩状押型文或は篦又は貝殼を以て凸凹の浪形突起を作つて飾としたものがある。厚手といつても丹塗土器・櫛目文土器に比較して稍々厚いといふ意味で、粗雜の胎土にて黑褐又は赭褐色を呈し、中國の褐陶に近く細かい砂粒を含んで居る。壺・皿・盌・植木鉢形等が多く、瘤状・樹株状・耳形・天狗鼻形等の把手のあるものが少くない。朝鮮から滿洲の小丘上の遺蹟には例外なく此種の土器を主とし、石器には磨石斧・石庖丁・石鏃・石槍等を伴ひ、只朝鮮にあつては咸鏡道を除き打石器が極めて稀である。丘陵遺蹟には滿洲吉林郊外の三ケ所の丘陵に見るように、明に要塞的設備を有する住居址と認められるものがある。丸尻の盌・高杯・器台等の土器のあることをも注目すべきである。

丹塗土器は良質の粘土を以て作り、轆轤を使用しないで比較的薄手にして巧妙に成形され、表面は滑かに磨き

上げて赤色又は紅色の丹を全面に塗り、文様は一切施さないのを原則とする。特例として咸鏡北道雄基貝塚に於て仰臥伸展葬墓に副葬した肩張の壺に丹塗の上に黒色の花文様を描き、又同性質の彩色壺の破片二三片を他から見出して居る。形は肩に張の強い竪頸の壺・平底・盌・肩の彎曲した鉢・高杯等で、形の上では関東州・熱河赤峰・蒙古小庫倫等の赤色土器に酷似し、河南・甘粛の彩陶に系統をひくものと筆者は早くから主張して居る。勿論、所謂彩色土器には全面に丹を塗つた装飾法は見られず、南露・トルキスタン・ドナウ地方其他のものにも斯る種類のものを見ないが丹塗土器にはその土作りも形も着色の方法も、彩色土器其ままといつてもよいものがあり、彩色土器の手法から自然に出てくるものと考へられる。雄基松坪洞貝塚を始めとして、雄基龍水洞・同琵琶島・会寧五洞・潼関鎮等の遺蹟に著しい分布を見せ、間島延吉小営子の階段墓に夥しい例が示された。これら北鮮の丹塗土器は精良質の粘土を使用してあるが水篩とは思はれず、悉く手捏ねであつて形は巧妙に薄手に作られてある。その点は伴出の厚手土器と著しい差異を示し、磨石斧・磨石鏃・打石鏃・石庖丁・紡錘車・骨錐・骨刺器・骨針等の伴出品によつて、純然たる石器時代のものたることを証拠立てて居る。然るに濃い丹を全面に塗つた稍々厚手丸尻の完形壺が、潼関の階段墓・昌原の石室墓・大邱の支石墓等から発見され、同形式の破片は各地の遺蹟からも見出されて居て、上記のものと性質を一にして居る。豆満江流域に特に多い丹塗土器が全鮮の丘陵遺蹟其他に波及して居ることは之によつて知られ、厚手無文土器系の遺蹟に丹塗土器と高杯・肩張りの壺の影響のあることは、共に注目すべきものがある。只、後述の櫛目文土器と丹塗土器とは共存の例が少く、雄基・会寧・岩寺里・清岩里等の豆満江・漢江・大同江流域の遺蹟にこの関係を明確に認め得るのである。前述の羅津油坂と釜山牧ノ島東山洞の貝塚にては、打石鏃・櫛目文土器・厚手土器・丹塗土器の共存を確認して、上記の夫れと趣を異にして居る。これについては後に私見を述べることとする。

櫛目文土器は櫛の歯様のもので土器の表面に刺突文・平行線文を飾つたもので、骨刺器等による突刺の孔列を飾に加へることも特色である。欧露並に西比利亜の櫛目文土器には繻糸形をモチーブとするものがあるが、文様全体の構成は櫛歯による文様と同一であつて、他の縄席文土器と趣を異にして居る。櫛目文土器の分布は沿海州の海岸地区に連続して咸鏡北道の海岸線に沿ひて濃密に南下し、咸鏡南道、江原道の海岸には少いが、慶尚南北

道の海岸、特に釜山附近に多く、全羅南北道の海岸は調査不十分で明でなく、京畿道の漢江下流域から黄海道平安南北道の海岸に著しい分布を見せ、大同江の下流域にも多く、鴨綠江の川口に達して居る。遼東南部の長山列島及び黄海沿岸の一部に見られるものが、同じ分布区域の延長であることは想像されてもよい。一般にこの種土器を有する遺蹟は海岸又は河岸の低地であつて、丘陵上遺蹟に見られることは極めて稀といつてよく、海岸又は大河に沿うて分布して居ることは北欧・欧露・西比利亜の例とも一致して居て、朝鮮に於ては遺蹟の分布がそのままこれを示して居る。海岸に於ては貝塚を構成し鈎針・銛等の骨器に富み、石鏃・石斧を主要の石器とし、稀に紡錘車・石庖丁の伴出はあつても、狩猟・漁獲の経済生活を中心として居たことが知られる。狩獸民の住居址とも考へられる丘陵上遺蹟が、丁字形石斧・石庖丁・鑿形石斧・紡錘車等に富み、早く農耕生活の影響をうけたかと考へられることとは逆の現象を示して居る。又櫛目文土器が朝鮮に於ける金属初期の貝塚・支石墓・積石墓甕棺墓等に影響を及ぼして居ないことと合せ考へて、比較的古い時期の文化かと思はれるが、純石器時代であるといふこと以外に、時代を確むるに足る材料は見出せない。

この櫛目文土器そのものの我國土内にての遺蹟に就いては筆者は直接調査の機会に惠まれて居ない。しかし所謂早期の縄文土器系遺蹟から発見された土器に、櫛目文土器の手法と認められるものの増加して來たことは興味深い。明に櫛目文の外に尖底が見られ、大陸式の土器の影響と見て誤がない様である。又伊東信雄君蒐集の樺太並に北海道の石器時代土器中にも櫛目文系統の土器があつて、其詳細の報告を待つ次第である。以上縄文系遺蹟の櫛目文系土器が比較的早期と推定されて居るのに対して、筑前遠賀川河床その他の彌生式系遺蹟に櫛目文類似の装飾を施したものがあり、長門の萩附近の彌生式土器にも明な櫛歯様施文の見られるものがある。これらにつきては類例を集め見聞を広くして更めて考察することとしたい。櫛目文土器の通有形式として注目すべきは(イ)良質粘土を用ゐ比較的薄手で胎土に長石粒・石綿を含むこと、(ロ)基本形として橡実形の尖底壺が多く、側面の彎曲以外に屈曲は少く、(ハ)文様は櫛歯様のものを以てする杉葉文・平行線文・連点文及び突刺文・刺孔文等で尖底の下端まで施文のものがあり、又表面滑平の無文様のものも稀ではない。以上の三点を比較考察して新らしい報告と所見とを寄せられむことを望む。

以上石器時代の三種の土器系統は、時期を異して夫々半島内に盛行し或は移入されたものと思はれるが、櫛目文土器を除き石器時代末期即ち金属時代初期まで継続して行はれて居り、厚手土器と丹塗土器とは接触して混合形式が出來、其頃には更に別系統の押型又は打型文を有する陶器即ち須恵器系のものが新に表はれて來る。

南部朝鮮の梁山南部洞・金海会峴里・東萊壽安洞・楽民洞の貝塚、慶州月城城壁下の住居址等は、多数の骨角器と僅かながら石器を包含し、鹿角柄の鉄刀子を発見することから金石併用期のものと考へられ、会峴里貝塚内発見の王莽の貨泉によつて、略々其成立時代の一端を知ることが出來るのである。又金海貝塚、月城下住居址から稲籾の多数見出されることは人の知る所である。これらの遺蹟には把手を有する厚手土器と丹塗土器の発達した形式の盛行を見、丹塗系の土器には、丹を塗らずして表面を美しく磨研して黄褐又は赭色の滑かな面を見せたものが多い。これに高杯と共に丸尻の壺の多く見られることを注目すべく、東萊楽民洞の合口甕棺内発見の小丸壺の如き、北九州の彌生式遺蹟に見られるものと全く同一である。甕棺亦細長い形の把手付壺の口を合せたものでその一例は同形のもの二個を横にし、他の一例は把手のある長壺に丸尻の大形平盌を蓋とし、内に上記の丸壺と鉄指輪一個を発見した。以上は何れも古式の彌生式土器と称しても何人にも諒解し得る程度のもので、明に轆轤仕上げであつて既に石器時代の両形式土器を脱化したものといへる。筆者の曾て原始彌生式土器と仮称したのはこの種を指し、以上の遺蹟の土器は此種の黄褐又は赭色のものが大半を占めて居る。金海会峴里の甕棺に至つては口縁扁平の大形の甕の口を合せて、横にしたもので三例を見、第二号甕棺の下に銅劍・銅尖頭器等を伴葬しあり、甕の形式は北九州の甕棺に似て稍原始的で傾斜せずして水平に安置することを特徴とする。この貝塚は鳳凰台台地の裾に広がつた厚い貝層を示し、台地上から貝塚にかけて竪穴と思はれるものがあり、土陶器の包含を見る。右の内、西北に延びた低い台地のくびれ目が曾て鳥居博士の調査によつて組合石棺の存在が言はれ、浜田博士によつて貨泉の発見された地点である。この低い台地の中央に巨大の平石があつてドルメンと推定され、ドルメン附近に多数の組合石棺と甕棺との一群があつたもので貝殼は此部分には無いが周囲の傾斜面に厚い層が見られ、貝塚・ドルメン・石棺・甕棺並に竪穴は一連の関係したものであること疑ない。鳳凰台を繞つて発見される土器は厚手土器・磨研土器と共に須恵系の陶器が半ばを占めて居る。厚手土器に把手特に天狗鼻形のものの多いこ

とが特色で、陶器にも突起状の把手を見る。

東萊・在水営・梁山・熊川・固城・泗川等の洛東江口から蟾津江口に至る貝塚は全く同性質で、其間に機張・東山洞・瀛仙町其他の櫛目文土器系の古式の貝塚が介在し趣を異にして居る。只これ等の櫛目文系の貝塚にも手捏ねの厚手土器と丹塗土器が混在し、須惠系のものの無いことを注意すべきである。

須惠系の陶器とは灰褐色・青黑色の堅緻の陶器で所謂新羅燒又は祝部燒を指す。上記の後期貝塚発見のものには赭色又は黃褐色にして純石器時代土器との中間の硬さのものも少くないが、何れも轆轤仕上げであり、比較的薄くして硬く、表面に格子文・葦葉文・繩席文等の押型又は打型裝飾のあるのが多い。近頃紹介されて來た浙江省方面の石器時代土器がこの形式である。時代の下つた南北朝時代の南方系の陶器亦此式の製作のもののあることが知られて來たのも興味ある事実である。突如として南鮮に表はれて來た須惠系の陶器が、所謂新羅燒の祖系であることはいふまでもなく、多分は登り窯式の高熱爐で燒かれ、江南方面からの新らしい移入の窯法では無いかと思ふ。百濟文化が南方系統であり、新羅一統時代にも直接江南の文物の輸入されたことは文獻上からも推測出來るが、もつと早い時代に季節風による此方面からの影響のあるべきを筆者は早くから說いて居る。北九州と洛東江流域の金屬初期文化を、北方からの樂浪帶方の仲介のみによるものと考へて良いかは疑問とされる。少くとも初期の須惠系陶器の由來にかく考へてよいものがあると信ずる。但し高句麗の古墳內遺物には漢式陶と共に押型文陶器があり漢口畔の百濟初期の土城にも夥しく発見されて居る。又朝鮮平壤・熱河欒平・南滿洲盤龍山等の明刀錢遺蹟にて、この種の陶壺に明刀の納められた確例がある。これに就ては「朝鮮発見の明刀錢と其遺蹟」(史学論叢)に詳述したことがあるのでこれを省略するが、朝鮮中部の遺蹟に須惠系陶器の発見例少く、北方からの伝來とするには材料が足りな過ぎるといへる。洛東江口を中心とする地域に著しい発展を見せて居て、対馬峰村銅劍遺蹟・永川漁隱洞漢鏡遺蹟・春川積石塚內等に発見の押型文陶器は、この地域からの波及と考へて差支ないが、平安道・咸鏡道方面のものに就ては後に議論の余地が残されて居る。

我國の古墳內発見の土陶器に灰褐色硬質の須惠器と赭色軟質の土師器とあることは人の知る所で、横穴墓內からは屢〻丹塗土器の見出されることも知られて居る。この赭色土器は彌生式系統のものとされて居るが、発達し

た形式の彌生式土器ではなくて、むしろ素朴な簡單のもののみでその退化形と考へられて居る。而かも全く系統を異にする陶器と土師器とが同一墓内に伴葬される例は、洛東江流域の新羅任那の古墳に極めて多く、漢口・錦江流域の百濟には稀である。硬い須惠系の新羅燒と赭色の丸味を帶びた土器が混然と墓内に供へられ、時には一器の蓋と身とが陶器と土器である例さへ見られる。赭色土器は平底の壺・高杯・蓋杯・蓋付盌・甑等で石器時代の土器さながらの天狗鼻・渦卷形・樹株形・小突起等の把手も何時までも保有して居る。この陶土器混用の風は一部新羅一統時代から高麗初期に及び、日本の奈良平平時代に当る。

新羅・百濟・任那の古墳内伴葬の遺物が、日本の上代墳墓の夫れと酷似し、特に陶土器に於て著しいことは考古学に志す何人も承認する所である。然らば此風は何れが先であり何れから伝へられたものであらうか、朝鮮の古墳内副葬の赭色土器は金石併用期の土器の一種である。轆轤製の薄手となり製作方法は優れて來ては居るが、把手を持ち彎曲面の工合など石器時代の厚手土器に一脈相通じて居り、発達の徑路はこれから説明出來る。日本の彌生式土器とも似て居るが、寧ろ朝鮮の金石併用期の夫れの直系と言ひたい。日本の古墳内発見の土師器は、必ずしも朝鮮の古墳内発見の赭色土器と全然同一といひ難いものがあり、彌生式土器に近いもの、或は後の奈良時代に見る土師器に似たものもある。然し、須惠系と土師系の両種が古墳内に併用されることと、何れも朝鮮の夫と同一手法たる点から、新らしく朝鮮から陶器と共に窯法を伝へたのではないかとも考へられる。土師器と彌生式土器との関係につきては速断を避け、問題の提起に止めて置く。

朝鮮に於ける土器の系統につき見聞の及ぶ所を以上概観した。右の内、日本の陶土器との直接の関係を如何に見たら良いか。

櫛目文土器の施文法・丸尻尖底の形式等の類似を一部縄文土器に認めて、早い時代の影響を考へる学者がある。櫛目文土器の影響と認められるものが樺太にあり北海道にも少くないことは最近に知られて來た。これと沿海州方面との関係は未だ確められて居ない。釜山牧ノ島の櫛目文土器系の貝塚に黑曜石の打石器があり、このことが專ら我國の考古学者の注目を惹いて、早期縄文土器系のものに連絡を求めようとする人もあるらしい。牧ノ島貝塚が比較的古いことは考へられるが、東山洞貝塚の櫛目文土器の如きは形式化した杉葉形文様が太線で示さ

れて居て、大同江畔清岩里の夫れと等しく、櫛目文土器としては多少時期が下るのではないかと考へる。又朝鮮内にあつては見聞の及ぶ所咸鏡北道以外に黒曜石器の発見を聞かず、打石器そのものが極めて少く、筆者の知る限では慶州・浦項・密陽等の数ヶ処に過ぎず、而かもフリント又はサヌカイトの類で黒曜石ではない。同じ櫛目文系遺蹟にしても漢江畔岩寺里・矢島、大同江畔清岩里その他には一切の打石器の発見を聞かない。咸鏡道には白頭山麓に黒曜石塊が多く、従つてその製品が少くないが、櫛目文系の遺蹟に限らず、厚手土器・丹塗土器と共に発見されるものが反て多い。櫛目文土器は打石鏃を伴ふと共に、より多く磨石鏃を伴出することは雄基でも会寧でも証拠立てられる。仍て櫛目文土器系遺蹟が厚手土器系の丘陵遺蹟より古いとする何等の証左も得られない。只、牧ノ島東山洞貝塚に限つて孤立して黒曜石器を有することは興味あることで、寧ろ北九州方面からの移入と考へられないことはない。日本海岸の遺蹟が陸地の沈下により半ば水中に没したものが多く、咸鏡南道・江原道・慶尚北道の海際遺蹟は殆ど見られないが、咸鏡北道と釜山牧ノ島との連絡関係も考へて見る必要がある。何れにしても、櫛目文土器と縄文式土器との関係及びその時代の新古につきては重要のことなので後考を期することとしたい。

遠賀川式土器の肩に施された平行線文は貝殻施文であつても形式上は櫛目文に似て居り、又萩附近及び瀬戸内方面の彌生式系の土器に施された櫛歯様のものによる文様は、櫛目文土器の影響を考へしめるものである。若し果してそうであるとすれば彌生式土器の年代決定に重要の指針となるものであるが、縄文土器関係に於けると同様、手許に資料を欠く今日、軽々に論断することを避けて新らしく研究を進めて見たい。

彌生式土器の基本形式には丸味を帯びて居ること、丸尻と器台と高杯とがあることも数へられる。これは朝鮮南部の金石併用期の赭色土器にも認められるもので、石器時代の厚手土器の系統をひくものなることは前に述べた。貝塚・ドルメン・甕棺墓・積石塚・組合石棺等に見られる土器は大体この系統である。又丹塗磨研土器は間島・咸北に最も多く見られて彩色土器の窯法をひくものと推定し、トルメン・組合石棺等の金石併用期の遺蹟に多いことも例を挙げた。彌生式土器が美しい丹塗磨研を特色とし、甕棺が赤く塗られたものの多いことも人の知る所である。

これらによつて、彌生式土器の原形と考へられるもの

は石器時代後期の朝鮮南部に出來上つて居て、一般形式となつて普及して居たことが考へられる。これが無文厚手土器と丹塗土器との混合形式なることは如上の說明で解釈出來たことと思ふ。しかしこれ等は日本の所謂彌生式土器そのものではなくて その原始形式の一種である。対馬・壹岐の彌生式土器にもこれに似たものがある。北九州・山陰山陽の西部には半島の石器時代中期及び後期の文化が伝へられたと考へてよいが、はつきりした遺蹟は今以て紹介されて居ない。磨石劍・鑿形石斧・磨石鏃・石庖丁等の特徴ある石器は朝鮮の石器時代中期から盛行したもので、金海・東萊・梁山・固城等の末期の貝塚には石器は少くなつて骨器が盛行し鉄器が見られる。從つて以上の大陸式石器を伴ふ日本の彌生式文化は、朝鮮の石器時代中期から後期へかけての影響を多分にうけたと考へられる。少くとも金海・梁山の貝塚の示す末期の時代ではなく、石器盛行の時期でなくてはならぬ。又朝鮮に於ける末期即ち金石併用期の重要の遺蹟である貝塚・支石墓・積石塚・甕棺墓の内、支石墓・積石塚の直接日本への伝來と思はれるものは少く、甕棺墓の甕棺さへも北九州のそれは遙に発達した形式である。大陸からの輸入たることに疑のない磨製短劍・細形銅劍・狹鋒銅鉾・銅戈から儀制的の仿製広鋒銅劍・銅鉾・銅戈が作り上げられ、又実用の青銅鐸に倣つて巨大な祭祀用かと思はれる銅鐸さへ出來上つた。これらの銅器文化が彌生式系統の主要の金属所産たることいふまでもなく、而かも銅劍銅鉾類と伴出する彌生式土器は既に発達した日本個有のものになつて居て、朝鮮南部に見られる夫ではない。少くとも金属遺物と伴出の彌生式土器に、原始的の形態又は大陸の土器そのままのものは見られない。

以上によつて、朝鮮の石器文化が西日本に伝來して強い影響を與へたのは、朝鮮の石器時代後期より下るとは考へられず、所謂金石併用期に先んずるものとして差支ない。石器時代の永い時代を通じて大陸文化は徐々に伝へられて來たであらうが、土器文化の影響が櫛目文土器を別としては中期・後期の何れもが日本に見られず、寧ろ後期及び末期の轆轤作りの利用された以後のものが彌生式土器として出來上つて居ることに解釈し難い点がある。之を解決するには石器時代を通じて南鮮と西日本とが文化的にも経済的にも非常に近い関係にある、同一文化圏内にあつたと考へるを捷徑とする。朝鮮の石器時代後期の各種土器並にその混合形式は西日本にも早く伝來し、南鮮のそれと平行して西日本に於て、特に北九州に於て一種の混合形式の土器が作られ、独自の発展をして彌生式土器となつたと考へられる。單なる模造ではなく

して仿製から日本独自の土器形式を作り上げた点は、銅劒・銅鉾・銅戈・銅鐸の仿製と趣を一にして居る。新文化を齎らした移住者の少くなかつたことも当然考へられるが、大陸式土器がやがて日本の彌生式土器となり、銅器の仿製が大陸のそれと異なつて來たように、伝來者自身が間もなく日本人になつてしまつたことは、上代の帰化人の歴史がこれを教へてくれる。

然らば大陸からの石器・土器の伝來を実年代の何時頃に比定するかは今直に論断出來ないが、日本に於ける彌生式土器の完成、少くともその中期の状態は朝鮮の石器時代後期にあり、合石併用期なること明で、銅器と共に鉄器の使用されたことは当然である。石器時代以來徐々に伝波したと思はれる大陸文化が、彌生式文化を作り上げるに至つたのはそこに何等かの刺戟を考へさせる。中國の戰國末の民族的動搖と中國民衆の東方への移住、明刀錢・布錢その他の滿洲・北朝鮮への分布はよく之を説明して居り、半島民衆の日本への渡來も之に関聯して略ゝ同じ時代と考へられる。秦末漢初にかけて民族的移動は更に著しく活潑であり、漢武帝の北部朝鮮に四郡を設置した頃はその頂上であつた。即ち西暦前三、四世紀頃から前一世紀にかけて、大陸文化の日本への著しい伝波が之によつて推定され、郡縣の設置後には北九州と大陸中心部との交通のあつたことは、中國の古文献によつても証拠立てられる。彌生式文化の隆盛期が西暦紀元頃とすれば、恰も中國文化の東漸と平行し、南鮮の文化の西日本への渡來の絶頂期であつたといへる。然らば彌生式文化そのものはもつと早く、少くとも西紀前二、三世紀頃に原形が作られて居たと推定せねばならず、その原資料たる朝鮮の土器文化に更に溯つた時にも渡來したと考ふべきである。

茲に注目すべきは西紀前一〇八年に成立した楽浪郡縣の地域にも、金石併用期の文石墓・積石塚・組合式石棺が数多く分布し、更に二三百年を溯ると思はれる箕子朝鮮・衛民朝鮮との関係が明でない。又櫛目文土器・厚手土器を持つ純石器時代の遺蹟もこの地域に豊富に見られる。仍て朝鮮の金石併用期の文化は漢人の西北鮮への殖民以前から初まつたといつてよく、北方の所謂古朝鮮國と南方の韓族の小邑落時代はその繁盛期に当るとして差支ない。然らば朝鮮の純石器時代の盛期は少くとも西紀前五六百年前まで考へることが出來、更に数百年を溯つて永い期間の継続が想定される。日本の金石併用期並に石器時代も、これに従つて従來考へて居たよりも古い時代からの発達としてよいと思ふ。南鮮に多くて北九州その他にもいくらか見られる押型文・打型文の須恵系陶器

が、彌生式土器の成立に大きな役割をして居ないことは、その時代が比較的古いことを示すのではあるまいか。――二三、三、三